

秋山公男著

『漱石文学論考——後期作品の方法と構造——』

戸田民子

実に歴大な量に及ぶ漱石文学研究書に、また一書、しかも貴重な一書が、新たに加わることになった。

秋山公男氏の『漱石文学論考——後期作品の方法と構造——』である。

本書は、サブタイトルにある如く、漱石の後期の作品——『彼岸過迄』・『行人』・『ころろ』・『道草』・『明暗』——が考究対象となっており、各作品ごとに各々二つの章立てがなされ、そこに著者の一九八〇〜八三年にかけて発表された十四篇の論文が収載されている。

以下順を追ってみていきたい。

『彼岸過迄』論は、第一章『彼岸過迄』の方法——読者本位と作者本位の共存——(I~VI)と、第二章『彼岸過迄』試論——「松本の話」の機能と時間構造——(I~III)から成っている。

先ず、第一章では作者の緒言「彼岸過に就て」を基底にして、副題の論証展開が実に丁寧かつ緻密になされている。すなわち著者は、緒言から「作者本位を堅持しつつも、可能な限り読者本位の

要素に織り込」んで創作されたものが『彼岸過迄』であった、との見地に立ち、前者に須永・松本（「雨の降る日」「須永の話」「松本の話」）を、後者に森本・敬太郎（「風呂の後」「停留所」「報告」）を各々配し、両者を融合させる方向で「構想を練っていたものと推察」する。

構想上の破綻は免れた『彼岸過迄』ではあったが、右の人物設定、則ち「聞き役の敬太郎と主たる話し手である須永との余りに大きな人間性の懸隔」により、作品形象上に大きな齟齬を来たすことになる。

周知のように敬太郎は「結末」で作者自身から、その「役割は絶えず受話器を耳にして『世間』を聞く一種の探訪に過ぎない存在と規定されている。これを受けて、従来の研究者が敬太郎を如何に考察してきたかを例示しつつ、著者は「作者の觀念が託された一種の象徴的存在」との見解を紙幅を割いて既出の緒言と照応しながら述べているのは注目すべきものがある。

こうした象徴的側面を有する敬太郎ではあるが、既述のように「作者本位」の中で「松本の話」「須永の話」を彼が聞く場合、著者の指摘にある如く、齟齬・違和感が多大である。しかも、それら各「話」の内容は、『彼岸過迄』以降の漱石の作品を考察する点で、その影響力は看過できないものがある。そこに触れたものが、すなわち第VI節の「須永市蔵——自己検証への礎石——」である。

なお、著者の『彼岸過迄』論は、本書の全体の24%をも占めて

いるが、その中で一番筆者が関心をひかれたのはこの第VI節であった。それは先に述べた如く、次回作『行人』以降、更に深く作者が凝視し続ける問題点への礎石と云う意味においてである。すなわち第一章第一節に「当時（『彼岸過迄』発表時―筆者註）の読者は『行人』以後の漱石とその作品に作者内奥の暗部の投影や我執の別扶など、夢にも期待してはいない」と、逸速く書かれてある内容の詳述が、正にこの第VI節に集約されているわけである。

作者自身の所謂「大患を契機にした自省は、否応なし（略）己れの過去の妄執と独善の実態を自覚させた（略）須永に託して自己の醜の別扶を試みさせた」その方法は、「現実の事件は済んで、それを後から回想」する形式で自己分析を行なう」それである。須永の「頭」と「胸」の相剋という観点からの嫉妬および我執の諸相を、著者は見事に分析し、『行人』以降にその問題が引きつがれ、深化されていくことを予知している。

次いで第二章であるが、この章での中心論点は、「松本の話」に焦点を絞って須永救済の意図を読みとること、作者漱石の時間錯覚の検証にあるわけだが、この時間錯覚の指摘は著者によって初めてなされた指摘であり、『行人』論考察上、大変に注目すべき論である。

『行人』論は、第一章『行人』の主題と構造（I-VI）、第二章『行人』の深層心理（I-VI）とから成っている。

第一章では、『行人』の主題に関する従来の研究者の論究の概要

を把握（この『行人』論のみならず、著者はいずれの作品論究の場合でも、実に丁寧に従来の諸説の整理を行っている。このことはまた本書の大きな特徴である。）した上で、「人間の我儘と嫉妬」と「性の争ひ」の部分に焦点を絞り、著者の『行人』における主題の考察を展開される。

先ず、「浅間しい人間」の我執についての検証が、二郎と三沢（あの女）、看護婦、三沢と狂女とその夫、一郎と二郎（専）、直とお重、等、男女幾様もの組合せのもとに行われている。言うまでもなくその中心は、二郎を間に一郎と直の三角関係の検証にある。

お直の一郎及び二郎への行為の中に、『三四郎』における美禰子の「無意識の偽善」を彷彿させるものがあることは、著者の指摘通りである。そのお直に「同情」する二郎は彼女にとって愛の対象者たり得ぬとの著者の説には合点いくが、二郎は直に、愛を抱いている訳ではない」との言には疑問がある。単に、全てに「自分より立ち勝つた兄」に対抗しての「我儘と嫉妬」及び「性の争ひ」の発揮であって、お直への「愛」（今ではなく「当時」は、その片鱗すらなかったのであろうか。

「帰つてから」の後の「塵勞」執筆までには作者の胃潰瘍の悪化に伴う五か月間の中絶期があり、そのことが『行人』の主題に変容（『塵勞』の二十八節以降）をみせることになったことは周知の通りである。それについて著者は、「一郎個人の知性の悲劇とでも言うべき課題へと変貌した」、すなわち「二郎の内包する『苦痛』

『不安』『恐ろしさ』（略）と関わって、『落付』『安心』『幸福』の

境界を求め『絶対即相對』を志向する道の模索」が新たな主題となつたと述べている。

第二章は、著者が一郎の言動の中に妄想を認め、更には『行人』執筆時が作者のその生涯において三度目の神経衰弱期と重なつていた事実に着目し、そこから大正三年当時の断片などと照応しながら論の展開がなされる。

断片および『漱石の思ひ出』『夢判断』を例示しつつ、ていねいに作品の分析が行われている。そして第一章で述べた主題が表のそれであるとするならば、第二章は、「表現の背後に沈み、自らも意識せざる潜在意識下で紡がれた狂気の夢想は、秘められた陰の主題」の論考であつたと著者は述べる。「狂気の夢想」とは、一つには作者自身の離婚願望が一郎に仮託され、「その真相を隠蔽するために要請した偽装」が、一郎の二郎と直二人に対する愛への嫉妬・妄想であり、一つには、件の「井上眼科で見初めた女」が作者の潜在意識下で、お貞のモデルとなつた西村瀟蔭の妹、梅（漱石の家の手伝い）に「重層化され」たことであつた。

いずれも新説である。殊に梅に対する漱石の心情は、著者自身「臆測の域を出ないが」とことわり書きを入れてはいるが、今後両説ともに、評者の議論を喚起するものがある。

『こゝろ』論は、第一章『こゝろ』の方法と構造（I~III）、第二章『こゝろ』の死と倫理——我執との相關——（I~V）とから成っている。

第一章では、『私』と『先生』の位置と役割を考察することで「作品形成の方法と作品構造の測面を捉えよう」としたものである。

先ず、従来の『こゝろ』論の中で『私』及び『先生』の捉え方を整理し、吟味検討がなされている。ついで『こゝろ』の主意は、「我執の呪縛力の実態を解析」する点にあり、「我執追尋への要請は何よりも漱石自身の回避し得ない課題であつた」とし、この考察をもつて更に第二章に入る。ここでは「先生のいう『善悪』の考察を中心となり、「罪の呵責と我執の深淵を覗き見た孤絶感」が「先生」を死に至らしめた」と著者は述べている。

『道草』論は、第一章『道草』——構想と方法（I~III）、第二章『道草』——鳥瞰図の諸相（I~III）とから成っている。

○『道草』は後期三部作とは異なり、現在からする過去の検証ではなしに、「継統中」の過去からする現在の検証を特質とする。

（略）己れの過去を見据える作者の冷徹な眼指は、私小説が陥りがちな作者と主人公の同一化による自己陶醉、ないしは自虐的な自己表出とはほど遠い。（略）『道草』に自己検証を通じての自己相対化を試みた作者に根本的な創作姿勢と相關する。（二六七頁）
○『道草』の叙法を一口で表現するなら、絶対的視点による相対叙法とも呼ぶべき（二六八頁）

○『道草』全篇を覆う絶対的視点、即ち語り手の視点は、言う迄もなく作者漱石のものである。（略）自己を相対化せんとする意志と、それを或る程度達成し得た作者にして始めて可能であつた

といえる。」(二七〇～一頁)

○『道草』は、自己を『恰も』『他人』の如く見据えるべく虚心と相対化を志し、『則天』はともあれ、せめて『去私』を心掛けたいと願う作者によって創作された作品である。」(二七一頁)

○「謙虚と真の自省を知らず、他者との通路も発見できず、依然として他者を侮蔑し続ける健三の不幸な実態こそが、作者の意図する自己検証、自己相対化の本意である。」(二七三頁)

○『道草』に執筆時の作者の現在の課題を求めらるなら、それは「略々冷厳な『過去』の検証による自己相対化・並びにそれを可能にする作家としての絶対的視点の模索を認められよう。」(二七四頁)

○『道草』の創作意図は、過去の愚かな己れを、修正せずに愚昧のままに検証すること置かれていた。」(二八五頁)

○「自身の過去を対象に据えた相対叙法と絶対的視点の確立、それが『道草』に企図された最終的な目的であった。」(二八六頁)

○『道草』に描かれる諸人物の迷妄、確執、貧欲、我執それ自体は悉く暗い。しかしそれを見詰める作者の眼指には、自他を公平無私に相対化せんとする、一種の清明さが看取される。」(二八九頁)

○「健三は検証される側の作中人物であり、作者はこれを検証する視点に立つ。総じて『道草』の世界は、自己検証を通じて自己相対化を図り、絶対的視点に立つ相対叙法の確立を庶幾する漱石によって俯瞰された、鳥瞰図の世界である。」(二九八頁)

とする第一章及び第二章の論究は、その冒頭に、

○「作者の『事実』への傾斜と相対叙法を可能にした絶対的視点獲得の観点から『道草』を一筆者註捉えてみたい。」(二九五頁)
と著者の述べた考えを実証したものである。そして、こうした『道草』における構想と方法が、次作『明暗』の「相対叙法を可能にした絶対的視点(語り手視点)の基盤の確立」及び、「相互に対立葛藤する諸人物の内界を精細かつ立体的に、医師の人体解剖をさえ想わせる冷静さと明晰さで描き切った絶対的視点による相対叙述の成熟」を引き出した、との視座を見事に検証している。

『明暗』論は、第一章『明暗』の方法(I～V)、第二章『明暗』の叙法と「則天去私」(I～III)とから成っている。

著者が『道草』論で述べた「相対叙法」論が本論での基調をなしていることは言うまでもない。

『明暗』では、二人の視点人物——津田とお延——が造型されていると提言する著者は、このことが意味するものを「両者の人格上の欠陥、或いは我執の実態が自ずと浮彫りにされ、結果的に相互の相対化が為されている」と説く。そしてこの両名をも含めた作中人物の内外をあますところなく照射する語り手の絶対的視点に注目する。更にはその語り手視点をお延とお秀の我執の様に焦点を合せ、本本が実に丹念かつ丁寧に読まれ、分析され検証されていく。(なお、ここで津田の我執について稿が譲られているのは残念なことであった。)

その結果、「愛の成立の可能性」ではなしに、「愛の戦争」の

解剖にある。『平和な暗闇が度胸比べと技巧比べで演出され』る、我執の種々相の解析」が、『明暗』で「追跡されているテーゼ」であると述べる。

「猜疑・背信・嫉妬・技巧・虚偽・虚栄・独善・偏見・頑迷・狡猾といった我執の醜」をいかに処理するか、いかにその苦痛から自己を救済するか、を文学的課題として追尋してやまなかつたのが夏目漱石である。その彼がたどりついた「則天去私」とは、『無我』『相对即絶対』の境界にはほぼ等しい概念である」と著者は述べ、「自己客体化・相对視を目して『道草』で創出された語り手の、絶対的視点による厳正無私な叙法の客観小説における最初の試みが『明暗』であった」と、見事に両者の相関を位置づけている。

(昭和六十二年十一月十日・桜楓社刊・五、八〇〇円)
(とだ・たみこ 夙川学院短期大学助教授)

書評

宮岡 薫氏著

『古代歌謡の構造』を読む

駒 木 敏

本書は、一貫して古代歌謡に関する論稿を世に問いつけられた宮岡薫氏の初めての論集であり、十数年来の研究の集大成ともい

うべき労作である。刊行を鶴首していた後学の一人として、改めて御教示を得る所が多かった。大方の読者の思いも同じであろう。我々はまた一つ、古代歌謡研究の大きな礎を与えられたことになる。

本書の課題は、『記・紀』を中心とする文献を根幹に据えて、『歌が物語と結合して記紀に成書化されるまでの過程』にあったはずの「多様な歌の実体」を探ることであり、その上で『記・紀』の現在における歌と物語の結合関係の原理を問うことである。つまり、掲げられた「古代歌謡の構造」とは、神話や歴史叙述の中に組み込まれた古代歌謡が、それぞれにいかなる伝承の過程を保ちつつ『記・紀』の現在に位置を占めているのか、ということの意味する。従来、歌謡を含む物語が粗上に載せられる場合、ともすればそれが生成過程や伝承の荷担者層の問題として、いわゆる氏族伝承論の中に解消される傾向が強かった。現有の文献を対象に据え、その内側から歌と物語の結合の論理を導き出そうとする本書の方法的視座は新しく、すぐれて今日的であるといえよう。それは、無前提な伝承論はいうまでもなく、様々なヴァリエーションをもって展開されている「歌語り論」とも、また、専ら『記・紀』の現在を対象化して歌と物語の関係を追う方法とも、方向性を分かつ。歌謡研究の側からいえば、『記・紀』の現在から重層する過去に視線を向け、歌謡の実態を想定した土橋寛氏の《古代歌謡》学の方法とも、一方これを批判的に捉え、『記・紀』の現在としてある歌謡の態様からその伝承及び「抒情」の独自の方法に